

審議会の公開について当審議会(平成25年11月11日実施)で審議したところ、「奈良県農業総合センター研究第三者評価会議は審議内容に知的財産に関する事項を含み、公開により新規性、進歩性が喪失する恐れがあるため「審議会等の会議の公開に関する指針」「イ⑤-c」(特定の者に不当に利益を与え又は不利益を及ぼすおそれがあるもの)に該当し、非公開とすることが望ましい。」と決定されました。このため、評価結果の概要のみを公表します。

平成25年度 奈良県農業総合センター研究第三者評価会議 評価結果

平成25年11月11日奈良県農業総合センター研究第三者評価会議が当センター内農業交流館で開催されました。これは、研究活動の公正かつ適切な評価により、効果的な研究・技術開発を推進する目的で平成18年度から導入したものです。その結果の概要をお知らせします。評価会議は知事から委嘱を受けた次の各分野の評価委員で構成しています。

(1)県内の農業・食品産業について幅広い知見のある専門家または有識者 (2)県内の農業者の代表 (3)農学・食品科学・バイオテクノロジー等に知見のある専門家または有識者 (4)流通・消費関連分野に幅広い知見のある専門家または有識者 (5)研究開発マネジメントに精通している専門家または有識者

評価対象課題は、

(1)事前評価課題 次年度新規に実施予定の研究課題(35課題)

(2)中間評価課題 現在実施している研究課題(56課題)

(3)事後評価課題 普及に移した研究課題の内、概ね3年を経過した課題(121課題)

これらの課題の内、第三者評価会議での対象課題は、センター研究監理委員会によって選出された、以下の5課題を対象としました。

～評価委員による総合評価と各研究課題の評価～

1. 総合評価

- ・非常に熱心に研究に取り組まれている。
- ・国の政策として攻める農業と言われているが、農業を活性化するためには生産者・消費者両方にアピールできる研究が求められている。
- ・機能性や付加価値など、従来とは少し見方の違う研究もスタートしている。今後も新しいアイデアで研究を進めていただきたい。
- ・研究成果をどういふふうにつけて、そのあとどういふ方向性をもって研究を続けていくかが、難しいところである。農業の基本は生産を安定させることであり、農業の基礎的な研究は残していただきたい。

2. 各研究課題の評価

[事前評価]

(1)大和野菜等の生体機能改善作用に及ぼす栽培時期と調理法の評価

評価 5:(研究を実施すべき)、4:(研究を実施してよい)、3:(研究資源に問題がなければ研究を実施してもよい)、
2:(研究内容を見直したうえで、再度評価すべき)、1:(研究を実施しない)

評価基準	評価	評価委員の意見
(1)生産者・実需者等ニーズ	4	<ul style="list-style-type: none"> ・機能性食品の開発と有効利用は社会的ニーズが大きい。 ・大和野菜の機能性評価の結果は、生産者にとっては生産販売におけるアピールポイントとなり、消費者にとっては大和野菜が身近に感じる効果がある。 ・食品の機能性に対する消費者ニーズは、今後一層高まると予想される。このニーズに応えられる技術の確立は生産者の実益につながるものなので、必要な研究である。 ・生産者と消費者をむすぶ大変有意義な研究。健康志向とマッチしている。生体機能改善作用を高める栽培時期や調理法までは是非、導いていただきたい。
(2)県農業・農政の必要性	4	<ul style="list-style-type: none"> ・奈良県では大和マナをはじめ多くの伝統野菜を有しており、普及のためには差別化を図る必要がある。 ・大和野菜の機能性をアピールすることによって消費・生産拡大を意図した研究として重要である。 ・将来的に必要な研究である。 ・農政としても必要な研究で、大和野菜のブランド力を高める点でも大切な研究と受け止める。
(3)緊急性	4	<ul style="list-style-type: none"> ・大和マナの機能性評価だけでなく、他の野菜についても早急に評価すべきである。 ・時間がかかると思われるが、長い目で研究に取り組んでほしい。
(4)科学・技術的意義	4	<ul style="list-style-type: none"> ・機能性を科学的に裏付けることで、需要増が見込まれる。
(5)目標・成果の明確性	4	<ul style="list-style-type: none"> ・目標は明確である。動物実験で満足せず、臨床試験での評価がほしい。 ・需要拡大については、将来的に目指して欲しいが、この3年間での成果とするのは難しいのではないか。
(6)目標達成の可能性	4	<ul style="list-style-type: none"> ・研究の目標は機能性評価の技術確立であるが、動物を用いた機能性評価の方法論だけでなく、その技術を大和野菜の消費・生産拡大に結びつける内容にして欲しい。 ・研究期間は3年間で充分だろうか。研究期間終了後の継続延長も視野に入れて取り組まれてはどうか。
(7)研究資源の妥当性	4	<ul style="list-style-type: none"> ・研究担当は的を得ている。
総合評価	4	-

[中間評価]

(2)小麦新品種「ふくはるか」高品質化のための生育診断技術の確立

評価 5:(研究を継続すべき)、4:(研究を継続してよい)、3:(研究資源に問題がなければ研究を継続してよい)、
2:(研究内容を見直し、再度評価すべき)、1:(研究を中止すべき)

評価基準	評価	評価委員の意見
(1)生産者・実需者等ニーズ	4	<ul style="list-style-type: none"> ・実需者ニーズに対応するためには、高品質・安定化は必要条件である。 ・国産品への消費者ニーズは根強い。助成金にも品質要件が定められ、必要な研究である。
(2)県農業・農政の必要性	4	<ul style="list-style-type: none"> ・そうめん業界等では、本試験の成果に期待するところは大きい。 ・国内産小麦を用いた奈良県の特産品が産出される可能性が高い。 ・試食したところ、味も良く、今後新たな奈良県の特産品となる可能性があると思う。 ・県農業・農政の観点からも本研究は重要。食生活の多様化により需要があるうどん、そうめん等麺類の食材として、国産小麦に大きな期待を寄せている。外国産に負けない国産品種の栽培利用は、水田の作付けを米から米以外のものへの転作を促す力があり、水田の有効利用につながる。また、そうめんの材料として、国産小麦を使うことで純国産を標榜できる県の特産品として育てることが必要。
(3)科学・技術的意義	4	<ul style="list-style-type: none"> ・より相関の高い新たな指標の検索も必要
(4)研究目標の達成度	4	<ul style="list-style-type: none"> ・試験場での技術はほぼ確立しているということなので、今後は実用化に向けてさらに取り組みを続けてほしい。
(5)今後の目標達成の可能性	4	<ul style="list-style-type: none"> ・圃場によるパラツキの原因解明が、目標達成のカギになる。 ・高タンパク質含量の小麦生産のための生育診断に加えて、その収量を高めるための技術も開発する必要がある。 ・残された課題が明確である。 ・今後の研究計画として、食味の有利性の評価をテーマとすることになっているが、ここまで到達していただきたい。
(6)研究資源の妥当性	4	<ul style="list-style-type: none"> ・普及部門との緻密で高度な連携が成果を生む。
総合評価	4	

[中間評価]

(3)新しいカキ果実加工品の開発

評価 5:(研究を継続すべき)、4:(研究を継続してよい)、3:(研究資源に問題がなければ研究を継続してよい)、2:(研究内容を見直し、再度評価すべき)、1:(研究を中止すべき)

評価基準	評価	評価委員の意見
(1)生産者・実需者等ニーズ	4	<ul style="list-style-type: none"> ・生柿の生産と加工の一体が産地の生長を促す。 ・カキ生産者にとっては加工用の果実生産が必要となる。 ・特産品の柿を有効に活用する方法である。加工しやすい技術も生産者に必要である。 ・また、消費者には新しいドライフルーツの提案となる可能性がある。 ・全国有数のカキの生産を誇る産地の農家が、最も望んでいることではないか。
(2)県農業・農政の必要性	4	<ul style="list-style-type: none"> ・産地のイメージアップの一手段になり得る。 ・奈良県におけるカキ栽培を発展させるために必要な研究である。 ・奈良の特産の柿を利用した新しいおみやげの可能性を感じる。
(3)科学・技術的意義	4	
(4)研究目標の達成度	4	
(5)今後の目標達成の可能性	3	<ul style="list-style-type: none"> ・糖蜜漬けや干し柿でバラツキが生じた原因の究明が必要。 ・早急に加工品を試験的に販売するなどをして、実用化に向けての問題点を見出し、それを解決するための研究も必要である。 ・食味や生産加工技術に加えて、マーケティングを意識して、さらに見栄えや形状、ネーミングなどの工夫を重ねてほしい。商品化まで、他の部署や他の機関と連携して研究を継続してほしい。 ・カキの糖蜜漬けと干し柿の開発を研究内容としているが、これにとらわれず、もう少し幅広く加工品の研究提案をしてほしい。
(6)研究資源の妥当性	4	<ul style="list-style-type: none"> ・加工業者の知恵を、今後の研究に活かす工夫も大事。
総合評価	4	-

[中間評価]

(4)成分調整ペレット堆肥製造時の窒素、水分等成分リアルタイム推定技術の実用化

評価 5:(研究を継続すべき)、4:(研究を継続してよい)、3:(研究資源に問題がなければ研究を継続してよい)、
2:(研究内容を見直し、再度評価すべき)、1:(研究を中止すべき)

評価基準	評価	評価委員の意見
(1)生産者・実需者等ニーズ	5	<ul style="list-style-type: none"> ・生産農家の施肥経費軽減と畜産廃棄物の利活用は、それぞれのニーズに合致する。 ・茶生産者にとって、所得を増加させるための有効な研究である。 ・肥料コストの削減、労力削減は生産者に必要。特産のお茶の生産を支える必要かつ重要な研究。
(2)県農業・農政の必要性	4	<ul style="list-style-type: none"> ・茶業の生産安定、経営安定のために、継続的に支援が必要である。
(3)科学・技術的意義	4	<ul style="list-style-type: none"> ・現場でリアルタイムに成分濃度を推定するには、湿潤堆肥サンプルを用いた技術開発が必要。
(4)研究目標の達成度	4	<ul style="list-style-type: none"> ・設定した目標を達成するため、確実に研究を進められている。
(5)今後の目標達成の可能性	4	<ul style="list-style-type: none"> ・試験研究年度内に、所期の成果を得るのに必要な事柄を整理する。 ・ペレット堆肥の量産化や、その使用による経営上での効果を検討する研究も早急に行うべきである。 ・残された課題も明確。この研究を現場に生かすために、茶農家と畜産業との継続的な連携方法について、他機関とも連携しながら今後取り組んでほしい。 ・畜産堆肥の均質化が課題とあるが、達成目標のリアルタイム測定法の確立まで相当な時間が必要なのはと推測。ただ、前期(H22～23)事業を引継ぎ、成分調整ペレット堆肥の製造実現につながるよう着実に進めていただくことを期待。
(6)研究資源の妥当性	4	
総合評価	4	-

[事後評価]

(5)イチゴ健全種苗生産のための病害検査プログラムの構築

評価 5: (研究目標を越える成果が得られ、普及・波及が図られた)、4: (研究目標を達成でき成果の普及・波及が見込まれるもの)、3: (ほぼ目標を達成できた)、2: (一部目標を達成できなかった)、1: (目標を達成できなかった)

評価基準	評価	評価委員の意見
(1)研究目標の達成度	4	<ul style="list-style-type: none"> ・着実に汚染圃場が減少している。 ・研究目標は達成されている。現場に普及するようにさらに取り組みを続けてほしい。
(2)科学・技術的意義	4	
(3)事業化・実用化等の可能性	4	<ul style="list-style-type: none"> ・事業化・実用化のためには、その他の重要病害を含め、防除技術の導入による総合管理技術を構築する必要がある。 ・今後、さらに診断技術の精度を上げる研究を続けるとともに、防除方法との組み合わせによる研究を行い、健全苗の供給システムを実用化すべきである。 ・重要な研究取り組みであり、目標達成を期待する。また、イチゴ農家が安心して栽培・収穫できるよう早期の総合管理システムの開発を望む。
(4)投入資源の妥当性	4	
総合評価	4	-